

令和 5 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

教養学部

学校教育学科

学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子と解答用紙を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子と解答用紙について、印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚配布しますが、1枚だけ提出しなさい。残りの1枚は下書き用です。
5. 解答は縦書きで書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

「みんな仲よく」という指導は小学校を通じてずっと続きますが、高学年になってくるとそれは単なるスローガンであって、現実にはそうならないことを多くの子どもが経験していきます。

前思春期は10～12歳頃の小学校高学年にあたる時期ですが、それまでの「みんな仲よく」的な緩やかな仲間関係から、性別や趣味・興味などによって選別された緊密な仲間関係に移行していきます。いわゆる「グループ」ができる時期で、この時期は「ギャングエイジ」とも呼ばれます。「ギャングエイジ」といっても犯罪集団化するわけではなく、単純に「構成員」「仲間集団」を強く意識する時期を表す言葉です。

「ギャングエイジ」では「同じ」であることが仲間関係の前提となり、仲間内だけで共有できる遊び、ルール、やり方、秘密などが大事にされます（この点は犯罪集団の「ギャング」とも共通しているかもしれませんが）。

「ギャングエイジ」の仲間関係がもっともわかりやすいのは、映画『ドラえもん』でしょう。「ドラえもん」はのび太くん、ドラえもん、ジャイアン、スネ夫くん、しずかちゃんという個性の違う5人（4人＋1体）の仲間がある秘密や目的を共有しながら共に行動し、それぞれの持っている能力を生かしてさまざまな困難に立ち向かっていくストーリーになっています。もちろんアニメなので誇張はされていますが（現実世界ではそんなに壮大な冒険に出られることはありません）、5人の関係性が「ギャングエイジ」の典型なのです。

不思議なことに映画の中でドラえもんたちは、相当危機的な状況になっても大人を頼りません。実はここにも「ギャングエイジ」の関係性の特徴が表れています。「ギャングエイジ」における集団には、秘密や目的を共有していない大人を仲間として入れることはできないのです。というか、大人に知られてしまったら秘密が秘密ではなくなってしまうので、仲間関係の前提が崩れる

てしまうのです。

前思春期の緊密な仲間関係は、それまでの決められた（あるいは、与えられた）枠組みによる仲間関係とは違って、自分で選んで結んだ関係であるという特徴を持っています。これが前思春期の重要性を浮き立たせています。こうした仲間関係を維持するために前思春期の子どもたちは、集団内での自分の立ち位置を意識せざるを得なくなり、それが他者から自分がどう見られているかを強く意識するきっかけになります。

「同じ」である仲間関係から、自分の「違い」を意識し始めるのが、まさに思春期の始まりです。自己中心のだった世界に他者から見た自分という視点が加わることで、それまでの自己意識が大きく揺さぶられ、自己像を再構築する必要があります。つまり、自己確立という大きな課題が、前思春期に続く思春期に立ちあがってくるのです。

話が少し脱線しますが、今の子どもたちには、前思春期における「ギャングエイジ」的な仲間集団がとてもなくなくなってきている印象があります。そもそも「ギャングエイジ」的な緊密な仲間集団は、空間的にも時間的にも多くの体験を共有できないと成り立ちません。ところが、近年は塾や習いごとに通っている子どもたちが多く、子ども同士が自由な枠組みで一緒に遊ぶ時間そのものが減っているのです。

また、空き地や野山のような子どもたちが自由に遊べる（それこそ秘密基地をつくれるような場所も今はほとんどなくなっており、危ないからという理由で親がつき添って子どもを遊ばせているような状況もしばしば見られます。

都会では、学区とは無関係に、居住地とは距離が離れた私立小学校に通っている子どもたちが増え、そもそも地域のコミュニティに帰属していない状況になっています。一方、地方では子どもの数が減り、気軽に遊びに行ける範囲に同年代の子どもがないという状態になっています。このような状況では、「ギャングエイジ」的な仲間集団が成立しません。

「ギャングエイジ」的な仲間集団は「同じ」を共有することが前提ですから、「同じ」である部分さえ共有していれば、他の部分に「違い」があってもお互いを受け入れることができます。むしろこの「違い」の部分こそが仲間集団の中での価値や存在意義になります（ドラえもん「それぞれのキャラを思い出してください」）。

思春期の予備段階としての前思春期において仲間集団を形成し、他者との「違い」を認識した上で仲間を受け入れられた社会的経験を得られないことが、「自分は受け入れられないのではないか」という対人関係における疑心暗鬼が生まれる要因になり、それが近年における思春期の子どもの自信のなさや自己否定感の強さに影響しているのではないかと、考えています。

思春期が「反抗期」となるのは身体的な発達によるものだけではなく、社会的な広がりもまた大きな要因です。小学生までは親や教師の指示によって行動することが多いのに対し、中学生になると自分自身の選択や判断で自主的に行動する場面が多くなり、実際にそうすることを周囲からも要求されるようになります。中学校や高校における部活動や生徒会活動はその典型で、そこに入るかどうかが、そこでなにをするのかの判断の多くが子どもに委ねられることとなります。さらに中学受験、高校受験の進路選択では、自分自身の今後の所属先さえも自分自身で選択しなければなりません。

こうした親や教師に直接的に依存しない社会的な役割の拡大や居場所の獲得、そしてそこでの人との出会いや経験が子どもたちの行動面における可能性を広げていきます。

思春期における「なにかをやってみよう」という思いは、しばしば「なんでもできる」にまで発展します。この状態は「自我が肥大する」とも言いますが、こうした誇大性が顕著に表れるのが俗に「中二病」と言われる状態です。「中二病」はもちろん病気でもなんでもなく、思春期の子どもに見られる「気の迷い」のようなものであり、自分に特別な能力や役割があると空想してみたり、実際にそのようにふるまってみたりするのです。思春期の子どもが、「邪悪な気配がする」「自分には大事な使命がある」などと言っていたり、突然、呪文や必殺技の名前を叫んでいたりしても、温かく見守ってあげてください。

実は、こうした思春期の誇大な傾向は、自己確立のための経験を積みあげていくために非常に重要で、誇大な傾向によるよい意味での「向こう見ず」が、大人であれば尻込みするような不確定かつ困難な状況にも立ち向かう力を与え、自己確立のための道なき道を進めてくれるのです。

「向こう見ず」は成功を生み出す一方で、多くの失敗や挫折も生み出します。失敗や挫折の経験を乗り越えていくことで心を強くしていくことも重要ですが、自己確立の過程においてさらに重要なのは、失敗したものを捨てることで可能性の幅を絞り込む

ていくことです。自分にとつてできることを選び、できないこと捨てることによつて自身の可能性を選別し、将来を具体化させていくのです。

〔出典：成重竜一郎『不登校に陥る子どもたち「思春期のつまずき」から抜け出すためのプロセス』(二〇二一年 合同出版)ただし一部を改変した。〕

設問一 傍線部アで、筆者は、「ギヤングエイジ」の仲間関係と述べていますが、それは、どういうことですか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二 傍線部イで、筆者は自分にとつてできることを選び、できないこと捨てることによつて自身の可能性を選別し、将来を具体化させていくと述べていますが、これについて、あなたはどうか考えますか。課題文を踏まえながら、あなたの考えを、自分の体験や見聞を交えて六〇〇字以内で述べなさい。